

(1) 目的

イチゴ炭疽病は、育苗期後半から本ぼ定植後に多発し、苗や定植株に立枯症状を引き起こすいちごの重要病害である。近年、本県においても育苗期後半～定植直前の本病の発生が増加傾向にあり、苗不足や減収による甚大な被害が生じている。また、QoI 剤（アゾキシストロピン水和剤）は、基幹薬剤として広く使用されており、平成 21 年に県内で耐性菌が確認されている。そこで、本剤に対する防除効果を明らかにするため、耐性菌の発生状況を調査する。

(2) 材料および方法

①供試菌株

県内 28 地点の発病株から、組織分離及び単孢子分離によって得られた 56 菌株

②検定方法 (PCR-RFLP)

『植物病原菌の薬剤感受性検定マニュアルⅡ』（日本植物防疫協会、2009）に従った。各菌株を PDB 培地で前培養後、菌体から MagExtractor-Plant genome kit (TOYOBO) により DNA を抽出し、PCR のテンプレートとした。PCR には GCCBF1 及び RSCBR2 のプライマーセットを用い、得られた増幅産物を制限酵素 (*Fnu4HI*) で処理し、切断の有無から耐性菌を判定した。

(3) 結果および考察

PCR-RFLP による検定の結果、供試した 56 菌株のうち 50 菌株において QoI 剤耐性が認められ、県内で発生した炭疽病菌のほとんどが耐性菌であった (表)。今回の検定結果と平成 21 年 (2009) に実施した検定結果を比較すると、QoI 剤耐性菌率は高くなっており、QoI 剤耐性の炭疽病菌が優占し、県内に広く分布していることが明らかとなった。

表 イチゴ炭疽病菌の QoI 剤耐性菌率 (%) の比較

検定実施年	H26 (2014)	H21 (2009)※	
菌株採集年	H25、26 (2013、2014)	H21 (2009)	H11 (1999)
供試菌株数	56	30	14
耐性菌率 (%)	89.3 (50/56)	76.7 (23/30)	0 (0/14)

※H21 (2009) 年の検定では、H21 年および H11 年に採集した菌株を供試。